

2025年度 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

報告者 部長 加藤篤彦

I 自己評価

1. 本校の教育目標

「みんななかよし すなおなところ こんきのよさ」

2. 本年度の重点目標

- 1) 教育重点「自分を伸び伸びと表現する～絵本や物語、音や音楽の視点から～」
- 2) 幼児教育の質向上のための整備、工事等
 - ・教育環境の充実、よりよい保護者会実施のため、保育室モニター追加設置(第二幼稚園)
 - ・園庭環境の安全維持のためバスレーンのコンクリート工事(第二幼稚園)
 - ・預かり保育昼寝ルームの設置(第二幼稚園)

3. 重点目標についての評価(A～D)と取り組み状況や課題

A・・・達成できた B・・・概ね達成できた C・・・達成が不十分 D・・・達成できていない

1) 「自分を伸び伸びと表現する」(A)

2024年度に引き続き、本年も「自分を伸び伸びと表現する」ことをテーマとして、アートの視点に“絵本”や“物語”、“音”や“音楽”を含む表現にも着目し、感性豊かに、創造的に遊びを広げていくことを大切にしてきた。

具体的には、一人一人の教職員が教育重点について意識を高めて保育を進め、子どもたちの興味関心を捉え、アートの視点から探究的な遊びへ繋がるよう環境を整えた。

その子どもたちの姿をエピソード記録としてまとめ、園全体や学年ごとに、研修を重ねた。

- ・園内研修にて取り組みを共有し、ワールドカフェ形式で学年を越えて意見交換を行い教育重点への理解を深めたり、自身の保育に取り入れたりすることへつなげた。
- ・学年ごとに実施している実践研究部では、年齢に応じた子どもの学びや個々の感度の高まり、探究する姿について捉えを共有し、理解を深めた。
- ・年長組では、実物の音を表現しようと、音づくりに試行錯誤したり、音が鳴る仕組みについて科学的に捉える視点が育ち「振動」に着目したりする探究活動が見られた。
- ・年中組では、日常のなかにある音を改めて発見するなど、音への感性を働かせ楽しむ姿が広がった。また絵本の世界に没入し、物語を楽しむ姿も見られた。
- ・年少・満3歳児組では、歌や読み聞かせを日常的に楽しみながら親しみ、音への気づき

や表現が育まれた。

- ・園まつりではアート教室による「音作り研究所」を開催し、身近な素材や道具で音を表現する体験をした。音への関心が高まり、遊びに取り入れる姿へと発展した。
- ・発表会では、年長児クラスが「オズの魔法使い」の物語を表現した。年長児全員での一体感を味わうとともに、物語の世界に入り込み、全身の細やかな動きや表情、目線まで役を表現する踊りに表れていた。
- ・保護者連絡ツール「おうちえん」を通してクラスごとに教育重点にかかわる遊びや活動を配信するほか、学期ごとに実践研究部としてのまとめを配信し、保護者と共有した。

2) 幼児教育の質向上のための整備、工事等 (A)

- ・教育環境の充実、よりよい保護者会実施のため、保育室モニター追加設置 (第二幼稚園) 昨年度、年長保育室にモニターを設置した効果の高さから、今年度は年中クラス、ASD クラスにもモニターを設置した。保護者会ではモニターを利用し、子どもの学びや成長を共有し教育への理解を深めた。保育では、遊びの共有や興味のきっかけづくり、認め合いに繋げるなどして活用している。
- ・園庭環境の安全維持のためバスレーンのコンクリート工事 (第二幼稚園) 老朽化したバス乗降ゾーンのコンクリートを張り替え、安全に登降園が行えるようにした。

4. 総合的な評価と今後の課題

各教師が教育重点への取り組みへ意識を高めて取り組み、保護者と共有してきたことに加え、積極的にその取り組みを地域や教育関係者にも発信してきたことで、客観的な評価を得た。その評価を活かし、教育重点への取り組みを中心に、よりよい保育、教育の質の向上に努めてきた。具体的な取り組みは以下 (ア～エ) である。

ア) とうきょうすくわくプログラムの実施 (2年目)

東京都の推進事業である『すくわくプログラム』は、すべての乳幼児の「伸びる・育つ (すくすく)」と「好奇心・探究心 (わくわく)」を応援する幼保共通のプログラムである。教育重点を、このプログラムの実施に繋げ、『なんで音ってあるんだろう? ~4歳児の音探しの旅~』 (4歳児) 『音と振動』 (5歳児) の2テーマの実践を行った。

4歳児は、“どうして音が違うのか” “なぜ音があるのか” と疑問や不思議に感じた子どもたちが“音”と向き合い、全身の感性を働かせて探究を深めていく過程や、物語の世界を音で表現する伸び伸びとした姿などについてまとめた。5歳児は、“なぜ音がするの?” という問いに対して、様々な経験から「空気が動くから」「空気は見えないけれど地震が起きているんだ」という予想を立て、見えない空気の振動を肌や目、手足の感覚を研ぎ澄ませて感じて、子どもたちなりに音のする仕組みを探っていく過程を追っていった。この2テーマについて東京都へ申請をした。

イ) とうきょうすくわくプログラムナビゲーター園としての活動

2024年度、2025年度の実践が評価され、2025年度2月より、「とうきょうすくわくプログラム」において、探究活動(子供の興味・関心に基づく主体的な学び)に積極的に取り組む園同士の学び合いや交流をリードする、中核となる幼稚園・保育所等の施設(すくわくナビゲーター園)として認定され、活動を開始した。

ウ) 武蔵野市委託研修の実施(4年目)

武蔵野市より「令和7年度武蔵野市幼児教育に関する専門研修」の委託を受け、『とうきょうすくわくプログラム実践発表会』を実施した。武蔵野市内の教育関係機関者、市内通園・未就園保護者80名ほどが参加をし、本園を含め市内3園による実践発表を行い、東京家政大学の野口隆子教授より講評をいただいた。本園の取り組みは、探究のプロセスを丁寧に追っていることや、“音”そのものと向き合う探究の視点、子どもの心の動きに添った探究活動の展開などに高い評価をいただいた。

エ) 研修会でのポスター発表

東京都私立幼稚園教育研修会主催「教育研究大会」、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構主催「幼児教育実践学会」にて、教育重点をテーマにしたポスター発表を行った。日本全国の私立幼稚園の教職員とともに本園の発表について意見交換する機会となり、互いの保育について語り合い、本園の実践の積み重ねや積極的な取り組みを評価された。

II 学校関係者評価

- 1) 重点の取り組みは、家庭においても自宅で紙芝居を作る姿(紙芝居に自分で字を書こうとする。紙芝居の原理を意識しながら作る等)や父親にも本を読み聞かせる姿がみられた。
- 2) 生活のなかにあるいろいろな音(カサカサ、じょりじょりなど)を意識して楽しむようになった。
- 3) 行事経験の積み重ねより、引っ込み思案だった息子に自信が付き、自己肯定感が高まった。
- 4) 図書館に出かけた折に、紙芝居借りたがるようになった。
- 5) 質疑応答にて、教育重点はどのように決定していくものか。との確認があった。
→ 「一年を振り返った教職員からの課題の精査」「時代背景やこれからの時代の教育に求められること」を部長が総合的に判断して決定している。
- 6) クラスサポーターのボランティアについてその内容が年度初めに事前に伝えられるとよい。
また、サポートで来園した際に、感想をその場でフィードバックできる仕組みがあるとよい。

以上